
桜の木の下で

美波可奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の木の下で

【Nコード】

N8788E

【作者名】

美波可奈

【あらすじ】

ある日出会った少女は強い瞳を持っていた

強い瞳を持つ少女 1

桜の木の下で君と一緒に歩いていこう。
ずっと一緒に歩いていこう。

俺が真理に誓った言葉。

桜の木の下で君はうつすらと微笑んで。
ありがとうと呟いた。

泉野真理。

初めて会ったときからずっと惹かれ続けたよ。

「真理ちゃん。一矢君。本当におめでとう。」

君が望んだみんなの祝福は嘘じゃなかった。

みんなが祝福してくれるまで待つてと君は呟いて。
何でだろうと思っていたら。

君のお姉ちゃんの影響だったんだね。

君のお姉ちゃんは随分と辛い目にあってたって？

だけど君のお姉ちゃんは俺にこう言った。

「真理を幸せにしてくれるのは一矢君しかない。」って。

君に似た意志の強い瞳で俺の背中を押してくれた。

「結花さん。」

君のお姉ちゃんは君よりずっと小さくて。

だけど君へ精一杯の心を送る。

「真理はね。トラブル体質だから随分と大変な思いしてきたと思うんだ。」

君のお姉ちゃんが言葉を紡ぐ。

「私が辛い時いつも傍にいてくれたんだよ。

もう大丈夫だからってこちら辺で姉妹の絆は終わりにしなくちゃね？」

君のお姉ちゃんはそう言つて。

ささやかな披露宴の次の日に姿を消した。

原因は真理と結花の両親に在ったんだけど。

教師だった結花は左遷された。

問題教師は飛ばそうと言う教育委員会の思惑だった。

君は泣いたね。

遣る瀬無くて。

君は叫んだね。

祝福はしてもらえたけどみんな幸せになつて欲しいって。

俺もそう思うよ。

強い瞳を持つ少女 2

俺が偶然出会ったのはそれこそ偶然じゃない。
必然的に神さまが出会わせて下さったんだと俺は思ってる。

それこそ今思えば俺があの日を選んで写真の専門の体験に行ったの
だって奇跡みたいなもんだし。

今から思えばあの日あの時間に家を出たのだった。

あの日あの時間にあの駅に辿り着いたのだったって奇跡みたいだと思う。

だってあと1分遅かったら俺は真理に会ってない。
すれ違ってもいなかったはず。

だからいくら有名でも知らなかった。

泉野真理がこんなにも愛しい存在だなんて。

「一矢。本当に高校行かないの？」

「だーかーらーまだわかんないって。」

だって俺叔母さんみたいになりたいんだ。」

俺はその日叔母の家にいたんだ。

そっちの方が写真の専門にも近かったし。

何より叔母は写真家だったから。

俺の憧れの人だったから。

人物は例外的で。

風景写真家の叔母は俺より5つ上なだけの人だったから。

20歳で写真家で売れるって。

そして何より若くで大成したくせに全然驕ったところもなくて。
才能があっただんだなって思う。

そしてよき理解者に出会い同じ人物写真家の叔父と結婚したのは19のころ。

真田美砂子。

それが俺の叔母の名前だった。

「一矢はそればっか。

私なんかすぐに追い越せるよ。

そんな事より高校ぐらい行きなさいって。

行っってからでも遅くないから。」

叔母はそう悟すけど。

でも俺の決心は悪いけど変わらない。

その時までは確かにそう思ってた。

強い瞳を持つ少女 3

「1番線に快速が止まります。白線の内側にお下がりください。」

聞きなれたアナウンスが駅構内に流れ。

俺は電車を待っていた。

其処へ大声が聞こえた。

「いやゝゝゝ助けて!!」

見ると1人の女性が半泣きで呆然とこちらを見つめていた。

もう1人の連れと見られる女性が丁度駅のコンクリートに倒される
ところだった。

俺の住んでる町ではこんな事はもう日常茶飯事になっちゃってて。

みんな又か的な視線しか送らなくなっていた。

退廃的でみんな誰かを蹴落とすために生きている。

でも俺は少しは他の奴よりはモラルがあったから。

これは助けないと反射的に思ってた。

本当は別に見て見ぬ振りをしても良かったのだけれど。

流石にその女性2人を見たら綺麗な顔をしてたけど2人とも車椅子
だったから。

障害者には優しくしなくちゃ。

変な意識燃やしちゃって。

俺は人を掻き分けて現場に行こうとしたとき。

綺麗な技が決まり。

イチヤモンをつけてた奴らが宙を飛んだ瞬間を俺は見た。

「弱い奴に優しくも出来ないのか。」

透き通った声と共に。

冷たい視線で睨んで。

まるでそいつらを凍りつかせるような眼差しで。

そいつは現れた。

「大丈夫か？」

手を差し延べコンクリに倒された女性に声をかけ。

「俺らは遊ぼうよって声をかけたただけだぜ？」

リーダー格の男が一言そう言ったとき。

「襲うの間違いだろ？」

そいつは低い声でそう言っ

た。リーダー格の男を締め上げた。

「くるしっ！！」

「お前らがやった事は単なる弱い者いじめだ。

強い奴に勝てないからって腹いせにこんな事やるんじゃないよ！

！」

「ふざけんなっ！！」

遂にキレた奴らがナイフを持ち出し。

女性2人は震え上がった。

「刺してみろよ！！！」

そいつは胸を張り大声で手刀を繰り出した。

そして形勢逆転。

そいつはナイフの刃を掴み血を流しながら。

言った。

「次はどいつだ？」

府立1高 1

「覚えてろよっ!!」

お決まりの捨て台詞でチンピラどもはナイフを抱え逃げていった。

「見せもんじゃねえよっ!!」

そいつは名も名乗らずに。

女性2人を車椅子に乗せるのを手伝って。

そして「やべっ。」と呟いて駅から出る道を歩き出した。

手のひらには血が滲んでいた。

でもそれを気にもせず前だけ見つめてずんずんと歩いていく。

俺はそいつの事が気になって気になって。

気になってそいつが何処を目指して歩いていくのか見届けたくなくて。

ストーカーみたいに間隔をあけ後を付いていった。

そいつの後姿は堂々としていて。

肩をいからせ歩いていく。

背は高く。

髪は長くて金髪で。

険しい瞳は前を向いて。

そしてその時話し声と共にカップルとすれ違った。

「あれえ?今の泉野じゃね?」

派手な化粧の姉ちゃんが振り向いて呟いた。

そしたら男の方が。

「ってか今いるわけないって。あいつスキップ受けるって今頃1高にいるって。」

「ってかあいつそんなに頭良いん？」

「マジ不公平じゃね？あいつスキップ出来るぐらい頭良いって？」

俺も受けてみるかな？」

「コウジじゃ無理だって。」

ギャハハと品のない笑い声で。

女の方が言う。

そして。

「まあ私らには関係ないって〜。」

そいつらは確かに言った。

あいつの名前は「泉野」だと。

そういえば聞いた事がある。

金髪姉ちゃんの武勇伝。

名前も名乗らずお礼を言う暇もないぐらいカッコ良く去っていく姉ちゃんの話。

そしてそいつらの話によれば今日はスキップの試験らしいじゃないか。

俺は金髪姉ちゃんが確かに府立1高に入っていくのを見たんだ。

よーーし。

俺の定番だな。

そう思って1高の門を潜った。

府立1高 2

府立1高の校長といえば。

狸親父の異名を持つ狸みたいな嫌な奴だった。

俺の兄貴も1高出だから当然俺も其処に行くだろうと親は思ってたに違いない。

だけど反旗を翻したからうちの親より1高の狸親父が慌てふためいた。

「真田のおぼっちゃん。」

と呼ばれてる俺は昔はどうしてそうなのかサッパリ判らなかったが、今ならわかる。

府立のくせに1高は3セクなもんだからいつも厳しい経営状態だった。

うちはうちの親が若いときにたてた一応プロダクションの名が付く会社を経営してて。

この時は売り出し中の歌手が鳴かず飛ばずの時期で結構経営は厳しかったように思うけど。

元々歌うたいだった母がすっぱり一線を退き裏方へと回ったお陰でうちはどうにかこうにか金持ちではないけれど他を援助できるぐらいの資金があったため。

そして兄がこの高校に行ったもんだから言わずと寄付金を出すと。

狸親父の奴うちの金で経営をどうにかこうにか持たせていたらしい。狸親父の悪いところは生徒のためを思ってるの行為なのにそうは見えないところだった。

生徒側から見れば要らない用具を購入して単位を増やし教育に力を

入れる。

そんな嫌な奴が狸親父だった。

本当は志は高かったはずの狸親父が単なるスパルタにしか見えないのか。

それが俺には疑問だったし。

それをうちの親も頭をかしげ。

「…前田さんは見かけと言動でだいぶ損をしてるな。」
そう言っていた。

ただうちの親は正しい人だから前田の狸親父は悪どい訳じゃないと判っているみたいで。

多分今年だって援助するだろう。

応接室に入った泉野が見えた。

そして数分も経たないうちに胸を張って出てきたのが遠くの俺からも見えた。

俺は階段を下り渡り廊下へと移動して。

…泉野とすれ違った。

………背が高かった。

………綺麗な指をしていた。

そして俺は泉野の後姿に。

手をかざして絶対振り向かせてみせると誓う。

そして泉野が出てきた応接室をノックした。

「失礼します。」

金髪姉ちゃんの武勇伝

「これはこれは真田のおぼっちゃん。ご両親はお元気ですか？」

部屋に入ると前田の狸親父は小さい瞳を精一杯見開き。

俺が部屋に入ったことを驚きの表情で見て。

でもすぐに取り繕って。

穏やかに見えそうな表情をつくり。

そう言った。

「前田さん。今の奴は？」

俺は単刀直入に言った。

前田の狸親父は俺の顔を見つめて。

「…泉野ですか？」

そう言った。

「そう。泉野。」

「ああ。あいつは今日スキップの試験だったんですが。

何か理由があるらしいんだけど頑固で理由を言わないんですよ。

大幅に時間は過ぎてるし何らかの救済措置だって確固たる理由が

あればとれるけど。

でもまあ元々あの金髪にピアスで団に入ってたって言うし。

私にとつては好都合で追いついてやりましたよ。」

「ただ意外だったのは。」

前田の親父は続ける。

「ただ意外だったのは泉野は言い訳も何もしなくて。

ただ遅れました。すみません。試験は無理ですよ。

そう言うだけでした。」

別に苛めてるわけじゃないのに。

前田の親父は言う。

俺には泉野の姿が見えるようだった。

何も言わずただ頭を下げるだけのあいつの姿が。

「言い訳すればもう少し可愛げがあるのに。」

前田の親父は言う。

でもそれが泉野だから。

それが潔いあいつの姿だから。

「前田さん。あいつはね。」

俺は事の次第を話した。

あいつは駅で人を2人も助けて。

名前も名乗らず自分が遅れてることの素振りも見せず。

綺麗な技で悪党をやっつけて。

巷では金髪姉ちゃんの武勇伝は有名だと。

俺だって実際に見るまで信じられなかった。

Never too late to call 1

「へえ……。あの泉野がねえ。」

前田の親父は言った。

感心そうな声を上げ。

「だったら素直にそう言えば私だって……。」

ブツブツと呟く。

「あいつはそんな奴じゃないから。」

俺はサッパリ泉野の事は知らないけれど。

そう思ったんだ。

「あいつはきつと言いつて訳をするようなみつともない真似をするぐらいなら最初から人を助けたりしないだろうし。あいつはきつとただ人を助けたかっただけで賞賛を得たかった訳でもなかったんじゃないかなって俺は思うんですけど。」

賞賛を得たかったならきつと初めから名前を名乗っただろう。

助けを受けた女の人に恩を着せて。

多分そして言うんだ。

「私はあなたたちをスキップの試験に遅れてまで助けたんだよ。」と。

泉野はただ。

ただ一言「やべっ」と呟いて。

此処まで歩いてきた。

そして校長の前田の親父に何も言わず。

胸を張って帰って行った。

「前田さん。」

俺は前田の親父を見つめ。

「俺は多分1高には入らないと思うけど。」

俺が入る入らないに関わらずうちの親は援助する気でいますから。
だから芽を摘み取らないで下さいね。泉野の。」

俺はね。あいつがいい事したのに報われないのが嫌だったんだ。

誰にも認められないのに人を助けられるあいつはきつと人一倍傷つ
いてるから。

自分のことを投げ出してまで人を助けられるだなんて凄くない？

俺が部屋を後にすると前田の親父は早速泉野に連絡したらしい。
報われないことは無いって泉野に伝えたかった。

誰かが君のこと見てるからって伝えたかったんだ。

その帰りだったか丁度俺の地元の友達に会ったんだ。

その友達は木村鞠子・聖子という双子の姉妹で。

俺は何かとこの双子の姉妹に相談を受けていた。

特に聖子の方は俺に好意を持ってくれていて。

1度も告られたことは無かったけど。

そういうのってどうしても感じてしまうものだから。

だからって俺は好きになったらモーションを自分からかける方だから。

だから絶対友達以上にはなれないって思ってる。

「一矢君こんなとこで何してるの？」

鞠子の方が俺に問う。

だって俺が1高の門を出たところだったから。

「鞠子ちゃんと聖子ちゃんは？」

我ながらバカな問いをしたと思うけど。

「変な一矢君。だって私たちここの生徒だし？」

聖子が訝しげな眼差しで俺を見る。

「そういえば私たちのバンドのボーカルって当てがある？」

加えて俺はプロダクションの息子だから。

以前からバンドを組みたかった鞠子と聖子は俺にボーカルの当てを聞いていた。

そこで閃いたんだ。

あいつにボーカルやらせるってこと。

まだ俺は面識ないし。

だけど絶対落としてみせるって自信はあった。

「何ニヤニヤしてんのよ。」

「いやいや。今度の新入生に楽しそうな奴が入ってくるから。

だからそれを聖子ちゃんたちのボーカルに当てたら面白そうだなあつて。」

「ひよつとして泉野？」

勘の良い聖子があいつの名前を出すからぎよつとした。

「新入生で楽しそうなのって泉野ぐらいじゃん？」

「聖子ちゃん知ってるの？」

「知ってるも何もかなり有名。」

あいつ強いのにそれを誇らないんだって？

私の友達も助けられたって言ってた。」

ねえ？と双子の姉を見つめる。

鞠子ちゃんも別で助けられた人を知ってるらしい。

「じゃあ。2人とも俺がもし泉野連れてきたらボーカルにしてくれる？」

2人とも間髪入れないで頷いた。

「私。泉野嫌いじゃないよ。」

「私も。」

どうせならかなりインパクトあるのがメインが良いよねって。

2人とも二つ返事だった。

そして2人とは1高の門の前で別れた。

あいつ強いのにそれを誇らないんだって。

聖子の声がこだまする。

こんなに世の中腐りきってるのに。
あいつは。

あいつだけは昔のように光を放ってる。

絶対に誇らないその姿は。

今の世の中に絶対必要。

俺は改めて誓った。

不思議なことに 1

不思議なことに聖子も鞠子も1番メインのボーカルをやりたいがらなかった。

そういえば近頃のバンドは歌がへたくそで演奏が下手でもルックスだけで持つてる女優の片手間みたいな歌手が多くて、バンドも多くて。

それに辟易してるんだって鞠子がいつか言ってた。

鞠子も聖子も歌は別に上手くないからって俺に最初に話を持って来た時に言ってた。

だってそれならバンド組んでも楽しくないんじゃないって聞いてみたら。

歌の上手いルックスだけじゃない面白いボーカル探してよって言われたんだ。

そして今日の前に憧れてた泉野が立ってる。

場所は1高の会議室。

所在無さげな面持ちはあの人を助けてた勇ましい姿とは打って変わって。

だけど瞳だけは鋭かった。

「…何の御用でしょうか？」

泉野って礼儀知らずで。

それは周りの印象。

きつと一矢君吊るし上げ食らうわよ。

それは友達のミサが言った言葉。

でも違った。

初めて聞く泉野の声は低くなく高くなく人を惹きつける声をして
いた。

「ねえ？ボーカルやる気ない？」

鞠子が授業を抜け出して会議室に来ていた。

「は？意味がわからないんですけど？」

泉野は鞠子を振り向き応えた。

「あのさ。俺たちバンドのボーカル探してて……。」

「……あの公募してたのですか？もう決まったって訊きましたけど？」

「……あれは名目で本当は君にやつてもらいたいんだ。俺たち。」

眼光鋭く俺を見上げ。

泉野は興味ないと一言言った。

困ったな。

そう思ったとき校長の狸が入ってきたんだ。

不思議なことに 2

「泉野さん。」

真田の狸親父が泉野の名前を呼んで。

泉野は教室に帰ろうとしていて。

振り返った。

「何ですか？」

前田の狸親父は苦笑いを浮かべながら。

「私はね。君に別に我が校に入って欲しい訳じゃなかった。」

そう言い出した。

泉野は眉根を上げ。

「私だってまさか受けさせてもらえるなんて思ってなかったです。」

そう切り替えしたから。

俺は面白くその状況を見ていた。

「でも。」

前田の親父が続ける。

「でも君は善行を言わなかった。きっと言う必要がないと判断したんだろう。」

君のその行動は感心できる。

そしてその状況を私に知らせてくれた厄介者がここにいるんだ。」

俺かよっ！！

思わず突っ込んだって。

けどとても突っ込みを入れられるような状況じゃなかったから俺は黙ってみてたんだ。

泉野は俺を軽く見上げ。

余計なこと言いやがってな顔を向けた。
へえへえ。

余計な事して済みませんでしたね。

俺は視線で返す。

泉野は口を開いた。

「私は別に賞賛を受けたかった訳じゃなく。

って言っても誰も信じてくれないから何も言わないだけで別にそれが美徳だとも思ってます。

ただ私が出来得ることをたまたまただけで。

私は親のお陰で強く育ったのに何にも出来なかったら悲しいから。

」

君はそう言ったね。

俺はあんまりらしくて噴き出しそうだった。

そんな俺を制して。

言葉を紡いだのは鞠子だった。

「泉野さんはユニークだね。」

不思議なことに 3

「だって本当に目の前にするまで私は君の事誤解してたよ。」
鞠子が言葉を続ける。

「人助けする人って大体名誉勲章欲しくない？」
モラルの低下から湊府はこの程名誉勲章なるものを定めた。
人助けをした人には名誉勲章と金一封が与えられる。
自薦他薦問わない。

「何ですか？その名誉何とかって？」

「えっ？知らないの？君高校生にもなってる？」

鞠子の何気ない言葉は泉野を困惑させた。

「だって私スキップだから。この前まで中学生やってたから。」

名誉勲章は高校生以上だって湊府は但し書きを添えた。

それはそれを取らせたい親のある意味リミッターだったから。

「…君幾つなの？」

鞠子は困惑の表情のまま。

泉野にそう訊いた。

「13です。」

泉野は大人びた眼差しのまま。
そう答えた。

俺だって驚いた。

若いとは知ってたけど。

自分よりも二つも三つも年下だなんて。

「…もういいですか？」

泉野は本気かよ視線の俺たちに耐え切れなくなったのか。
自分から話を打ち切ろうとした。

「俺。諦めないから。」

その泉野の後姿に。

俺は一言そう言った。

何に？

今の時点ではわからないけど。

でもとりあえずあいつを説得してみせる。

泉野が去った後。

鞠子が呟いた。

「強烈…。だけど本気であいつにボーカルやって欲しい。」

「でしょ？」

俺は鞠子ににやつと笑い。

次の手段を考えたんだ。

俺は絶対あいつを落としてみせる。

想い 1

「…懲りもせずまた来たんですか？」

泉野は眉根を寄せ。

泉野の家の道場に顔を出した。

俺にとっては伏線で。

泉野にとっては予想外の行動だった。

泉野のお父さんは道場の主で。

段持ちの強面だった。

でも俺は過去を知ってる。

うちの親が言うには。

昔は大手のプロダクションだった泉野のお父さんは。

当時歌うたいだった彼女を見初め。

俺の親父に勝って結婚した。

その後俺の家が泉野の家を吸収合併して。

今に至る。

泉野のお父さんは強面で。

初めは俺を見て眉根を寄せたけど。

俺が真田の息子だと挨拶をすると態度が軟化した。

それを見て事情が飲み込めない泉野は更に困惑した。

きっと俺が追い返されるだけだろうと思っていたに違いない。

そうは問屋は卸さない。

だって俺言っただでしょ？

諦めないからって。

「俺ね。泉野さん。」

眉根を寄せて組み手をする俺は泉野に語りかけた。

「絶対諦めないって言ったでしょ？」

泉野さんみたいに強くなりたい子って沢山いると思うんだ。」

逆風に負けない。

世間に染まらない。

だけど勇気が無い。

「俺はメディアに泉野さんが出て。

その勇気を配信して欲しいんだ。」

「私はそんな事望んでないし興味ない。」

「…判ってるよ。そんな事。」

君がそんなの望んでない事も。

君が目立ちたがり屋じゃないことだって。

「だけどね。鞠子ちゃんや聖子ちゃんはそうは言わなかった。

泉野さんにボーカルやって欲しいって。

泉野さんじゃなきゃ要らないって。

泉野さんがやらないなら夢だったバンド組むのも諦めるって。」

「そんなのそちらの勝手じゃないですか！！！」

泉野は流石にキレた。

運命を勝手に託されて。

夢を持ち出してきつと酷いと思ってるだろう。

「…君はわざわざ真理を怒らせに来たのか？」

流石にその様子を見ていた泉野のお父さんが口を開いた。

「いいえ〜？だって楽しいじゃん？」
いまどき珍しく純粋な瞳は。

「泉野さん。俺ね1高じゃないから放課後しかあいつを捕まえられないんです。

だからわざわざ来てるんです。

地位や名声を欲しい訳じゃないってあいつ見てたらよく判ります。
あいつがメディアに出たらきつと世間は驚くだろうと思う。

俺はあいつが好きです。」

ポロツと出た本音に。

俺自身も焦った。

だって泉野の親相手に言う台詞じゃないから。

「昔の俺そつくりだな。」

泉野の親はそう呟いた。

「それは光栄ですよ。泉野さん。」

泉野は決して人に媚びないから。

泉野が道場を出て行った後の扉を見つめ。

「俺。人を好きになるって本当はどんなか知らなかったんだ。

多分そいつの事だけ特別って思うことなんだとは思っただけど。

俺は泉野が好き。

多分それだけでいいんだと思うんだ。」

どうせ胸中がばれたから。

仕方ないから全部吐露した。

「恋愛感情なら君は真理に求めるんだろ？」

「いいえ……？俺これでも古風なんです。
結婚するまで求めません。」

自制はきかせますから心配しないで下さい。」

「例えば真理と2人つきりになったとき。

君はちゃんと出来るって言うのか？」

「残念ながら俺の両親は俺たちをフランクには育てなかったんで。
大好きな人と2人になっても大丈夫だという証が無ければ。

多分俺のこの思いは潰れると思う。」

俺の両親はきっと俺を許さないだろう。」

そうなると困るんで俺は出来るだけ泉野とは2人きりになりませ
ん。」

ちゃんと俺がやってると認めてくれる人を誰か立てます。」

今日みたいに堂々と泉野のお父さんとかね。」

俺の思いは間違ってると思う。」

あいつが好き。」

ただ単純にそれだけだから。」

想い 2

校門の前でまた俺は泉野を待っていると。

クスクスと笑いながら通っていく女子高生が沢山いた。

泉野は良い意味でも悪い意味でも有名だったから。

その中で一際目立つ眼差しを俺に向けてきた女子高生は間違いなく犯罪者の目をしていた。

俺に憎悪のまなざしを向け何かをたくらんでる表情で。

「泉野は来ないよ。」

そう一言だけ俺に発し。

薄ら笑いを浮かべ背筋がゾツとした。

泉野は来ないよ。

その意味は？

道路の反対側に目を向けると泉野が走っていく姿が見えた。

何処へ行くんだ？

だってあつちは不良の溜まり場で有名な地域で。

そりゃ泉野は団に入ってたって言うけれど。

それにしても…………。

「あなたお節介だね？」

さっきの女が気づけば俺の前を走っていて。
なかなか追いつけなかった。

「…良いよ。やれよ。」

泉野の声がした。

潔い泉野の声がした。

その視線の先には。

三人もの男が立っていて。

そしてその時には勝手に体が動いていた。

助けなきゃとか。

守らなきゃとか？

そんな使命感じゃなくてただ単に体が勝手に動いて。

俺たち有段者が本当は使っちゃならない技で。

でも技を男にかけた直前に俺は気づいて。

力を極端に抜いたから。

体に激痛が走った。

「一矢！！」

判ってる。

本当は激痛が何で走ったかとか。

あのままじゃ足が完全にイカれる事だって。

バシッ！！！！

泣きながら俺のために女を殴った泉野は。

肌蹴た服そのまま。

そして泣きながら俺に言った。

「何で助けてくれたの？」

決まってる。

俺は泉野が好きだから。

「一矢。痛いなあ。」

早く病院連れて行くから。」

痛みで朦朧とする意識の中で。

泉野が俺の名前を呼んでくれることに妙に感動を覚え。

ああ。怪我のし甲斐があつたなんて思つたんだ。

泉野に怒られそうだけど。

強くて綺麗な心 1

そして泉野は俺のこの怪我を考え方の転機にして。
初めは期限付きでバンドを結成した。

名前はWAIT FOR YOU。

これは由来は何かとは特に聞いた事はなかったけど。
聖子と鞠子が年上のお姉さんらしく泉野に名前を付けることを譲ったから。

いつも両手を広げそこで待ってるあなたは。
いつも私を待っていてくれた。

苦しいとき辛いとき。
ずっと待っていてくれた。

あなたはまるでシンデレラのようだね？

灰かぶりと呼ばれ疎まれて。
でも澄んだ瞳は変わらず。
何にも誇らず。

私はあなたのようになりたかったのかもしれない

：

泉野たちのデビュー曲はバンドと同じ名前だった。
CDを作った瞬間に売れ始め。

俺の予想通り週間チャートで1位を取った。

キャッチフレーズは金髪姉ちゃんが奏でる愛の歌。
反吐が出そうなフレーズだけど泉野は顔を赤らめ。
もう少しやってみようかと言った。

泉野はこの頃学校で友達を失って。
その時も運良く俺は其処に居合わせる事が出来て。
病院ですつと肩を抱いていた。

はらはらと涙を零す泉野は普通の少女だった。
いくら強くてもまだ13の少女だった。

「かおるが言っただ。真理は人を勇気づけられる何かを持ってるから。って。」
だから。

そう泉野は言った。

「だから私デビュー曲も出せたからもう少し頑張ってみる。」って。

実際は売れる人間なんて一握りで。

デビュー曲は売れてもその後が続かない人間なんて五万といるから。
だけど泉野は失ったかおるという子に誓った。

そのかおるという子が泉野を襲わせたチンピラを雇った張本人の井上光子のお姉さんだと気づいたのはだいぶ経ってから的事で。

俺の印象はすこぶる悪くて。

井上光子には近づくなと何回泉野に言っても泉野は薄く笑って。

「大丈夫だって一矢。」

そう笑って言うから。

俺はどれだけ心配した事か。

強くて綺麗な心 2

それから。

それから結構泉野は波乱万丈の人生を送っていく。

まずは泉野の両親が心中した。

それは正確には泉野のお母さんが泉野のお父さんを殺して。自分は昔の泉野プロが在った場所から飛び降り自殺をした。

泉野は初のツアーの真っ只中で。

でもそんな事言ってられなくて。

その連絡を受けた時泉野は泣き崩れると思った。

だけど薄く笑って。

我慢するから。

聖子がキレタ。

「どうして我慢するの??泣いたって良いじゃない?」

その様子を泉野は見て困惑した。

「私は大丈夫だよ?」

「だって何で泣かないの?悲しくないの?」

聖子は気性が激しくて。

もうどっちがどうなのか判らないぐらい取り乱した。

だけど純粹に泉野を思う気持ちは人一倍あって。

だけど。

きつと今の泉野には重すぎて。

でも大人びた泉野が言う。

「聖子。ごめんね?」

そう言って泉野はツアーから抜けた。

残された聖子は呟く。

「何でなんだろうね？私こんな事が言いたいんじゃないのに。」

「真理が強くて滅多に弱音吐かない事で私たちは救われてるのに。」

俺は何も言えずに。

聖子を見ると。

聖子が近寄ってきて。

「ねえ？一矢君。私のこと真理の代わりに抱いてもいいよ？」
そう言った。

聖子が俺に好意を寄せてくれてる事は知ってたけど。

こんなあからさまに言われるだなんて思わなかったから。

俺は戸惑い聖子を見た。

「だって一矢君？真理の事好きだけど手を出せないんでしょ？」
そうだけど。

そう思うと聖子が俺の手を掴み自分の胸元に持っていた。

正直柔らかかったし。

正直胸は大きかったし。

でもね。

俺は意を決して聖子に胸から自分の手を離して。

「聖子ちゃん。俺ねそんなことしたらきつと泉野にもう好きだって
言えなくなっちゃうよ…。」

だってやっとの思いで。

男の欲望は計り知れないから。

俺は泉野のお父さんに言ったから。

泉野のこと結婚するまで求めませんって。

「俺弱いから誘惑しないで欲しいよ。」

聖子ちゃんプロポーシヨン抜群だし可愛いからくらくらって来ちゃうよ。

「だけど俺は泉野が好きなんだ。」

聖子は溜息をついて。

「そう言うと思ってた。」

そう呟いた。

「それでこそ私の好きな一矢君だ。」

復活ライブ 1

泉野がツアーを抜けると基本俺たちがやる事も限られてくるのでオフに入った。

泉野はダメーじがでかすぎてもしかしたらこのままボーカル辞めてしまいかもしれないってチラツと鞠子が呟くと。

聖子が怒ってそんな事ない。あいつは強い奴だから必ず立ち直るってそう強く言ったから。

泉野を信じる気持ちは鞠子より聖子の方が強いと知れた。

俺だってチラツと辞めちゃうかもなって思ったりするけど。

聖子のように待つのも良いと思う。

バンドの名前に恥じないように。

俺は恥ずかしかった。

少しでもあいつがこのまま潰れてボーカル辞めてしまいかもしれないって疑った事が。

1番信じてやらなきゃいけないのは1番きつと泉野のことを好きな俺な筈なのに。

そんな自分のことで我俣を言った事があいつは無いこと知ってるのに。

ごめんな。泉野。

そして俺が悔いてるうちに泉野は戻ってきた。

泉野は俺の顔を見てすぐにこう言った。

「一矢。次の土曜ライブ出来るかな？」

ウェイトフォーユー復活ライブ。」

そう言う泉野の横顔は試練を乗り越えまた強くなっていた。
どうしてだろう？

神さまはこんな小さなまだ13歳の少女に試練を与えるのだろうか？
背は高く強い眼差しで生きている泉野を。
これ以上苦しめないで。

強い泉野に俺たちは救われてるのに。

そして復活ライブは予定通り行われ大成功を収めた。

泉野は開口一番ファンのみんなにこう言った。

「みんなただいま！！

ありがとう待っていてくれて。

みんなが待っていてくれたから私は途中で辞める訳にはいかなかった。
た。

本当は凄くショックで心が壊れてしまったかもって思ったんだけど。
ど。

だけど私このバンドが大好きなんだ。

私みんなが大好きで。

その事を再確認したんだ。休んでる間。」

熱い歓声と鼓動。

俺は泉野の後ろで座ってギターを持っていた。

泉野の後姿は何だか戦場へ立ち向かう女戦士みたいに見えた。

良かったね。泉野。

本当に心が壊れなくて良かったよ。

復活ライブ 2

それから。

復活ライブをしてやっとバンドが軌道にのってきた頃。

今度はライブ会場の襲撃事件に遭ったんだ。

俺はその時幸いなのか何なのか判らないけど写真家の叔母の家にいて。

まだ治りきらない足の怪我に悩ませられながら写真の課題をやっていた。

すると先の話に出た泉野の強姦未遂事件の張本人の井上光子が訪ねてきて。

ライブの襲撃事件を教えてくれた。

俺はそんな事とは知らないから井上光子が現れた途端。

首を締め上げていた。

井上光子は当初会ったときの犯罪者のような眼差しは影を潜め、変わって大きな瞳は微かな光を放っていた。

「私の所為で泉野…」

っていうか私が雇ったチンピラが泉野のこと恨んでて。

私あんなヤバイ奴らだって知らなくて…。

銃を持って泉野のバンド会場襲撃して…。

これが病院の……。」

俺は其処まで聞くと上着を持ってそのメモを貰い。

駆け出した。

泉野は怪我をしたのか？とか。

命に別状はないのか？とか。

聴きたいことは一杯あったけど。

目の前の井上光子は今にも倒れそうに顔色が悪くて。

俺は井上光子を責められなかった。

教えてくれただけありがたいって思えたんだ。

俺は井上光子を許さないって思ってたのに。

「一矢！！こらっ！！」

後ろで叔母の声が聞こえたけど。

無視して走った。

中央病院は閑散としてた。

閉まる直前の病院は嫌いだ。

其処に佇む泉野を発見した時。

俺は死ぬかと思ったんだ。

後遺症 1

無事で良かった。
俺って浅はかで
本当に。

泉野は瞳を腫らして佇んで居た。
思わず声に出たのは。

「無事で良かった。」
そればかり。

「…一矢。」

泉野は力ない声で俺の名を呼び。
両手は血で濡れていた。

ライブ最中の事件だったから泉野は肩の大きく開いた衣装のまま。
化粧は中途半端に落ちて。

「私ね。守られてばかりだったんだ。
有段者のくせに動けなかった。」

自嘲気味の抑揚のない声と。
力ない震える腕。

「どうして？どうして私じゃなくて私の周りだけこんなに！！！！」
悲痛の叫びは病院内全体に響き。
「どうして私だけ無事なんだ？」

俺は無言で抱きしめた。
良かったと。

泉野じゃなくて良かったと思う自分がいて。
こんなにも愛していて。
狂いそうで。

「一矢？泣いてるの？」
俺は涙を気づけば流していた。
それは安堵の涙。

「こんな事言つと真理は絶対怒ると思うけど言わせて？」
俺は前置きつきで。

「真理じゃなくて良かった。」

「！！！！一矢！！本気でそんな事言つの？」

「ああ。本気。だって俺泉野真理が好きだから！！！」

真理は顔を紅くして。

「こんな時に不謹慎だ！！！」

つて怒るから。

だけど俺は。

だけど俺は言わずにいらなかった。

だって今出来ることやらないと出来なくなることもあるって事。
忘れてた。

こんなにも深く真理は俺の心に棲みついで。

狂いそうなほど大好きで。

心臓が止まるかと思うほど事件を聞いてびっくりしたから。
告白は今しかないって思ったんだ。

ICUの前。

鞠子が駆け寄ってきた。

「一矢君。真理。」

鞠子の顔は青ざめていたけれど。

「聖子は峠を越したって。

今からリハビリが大変だろうけど命に別状はないって。」

その鞠子の表情は静謐そのものだった。

真理は唇をかみ締めた。

後遺症 2

君は俺の隣りで白い壁を見つめ。

「…鞠子。ごめんって聖子に伝えてくれる？」
そう言った。

「…構わないけど会って行かないの？」

鞠子は静謐な表情で真理に言う。

真理は首を振って。

「あわせる顔がないよ。」

そう言って力なく笑ったから。

「だって私。一矢にも言っただけど有段者で。

他の人間よりずっと強くて。

それなのに足が竦んで動けなくて。

自分が臆病なの判ってたはずなのにもっと機敏に動いてれば聖子
じゃなく私が撃たれたかもしれないのに。」

人を助けられない重みはこんなもんじゃないけど。

自分が人に助けられて生きるだなんて最低だ。

真理はそう言ったから。

そこまで黙って聞いてた鞠子が静かな声をあげた。

芯の強い鞠子が声を荒げるのは初めて見た。

「だったら助けた価値無いでしょう？」

たった一人の血を分けた妹の弁明を姉がする。

「聖子は今気が付いて私に言っただよ？」

真理は無事かって。

私が無事だつて答えたら良かったつて言つてた。」

一呼吸置いて鞠子は続ける。

「聖子はドラムスだったから両肩負傷できつともうドラムは叩けな
いってお医者さんから言われたから

それを伝えたら真理が無事だったからいいやつて言つてたんだよ？
それなのに会いもせず逃げるの？

聖子は本当に1番真理の事好きなのに。

姉の私よりね？」

「真理。」

俺はそこで口を挟んだ。

「真理。助けてもらつてお礼も言わずに帰るのはどうかと思つぞ？」

「煩い！！一矢。」

真理の小さな肩は震えていた。

怖くて怖くて。

声も上げず泣いていた。

「……だつて私聖子にどう謝つていいかなんて判らない。」

「お礼でいいんじゃないの？」

素直に助けてくれて有難うつてそれでいいんじゃないの？」

鞠子が真理を立てさせてICUの中に連れて行つた。

後に残された俺は胸を撫で下ろし。

「心臓が幾つあつても足りんわ。本当に。」

そう思つた。

活動開始

あいつを愛すると決めた時からずっと。
それこそずっと。

あいつを愛するにはそれなりの覚悟がいるって知ってた。
トラブル体質なのか単なる偶然なのかわからないけど。
あいつは過酷な運命を背負って生きていく。
前だけ見つめて。

本当は襲撃事件のとき真理の心は砕けて。
芸能界によくいる麻薬中毒者か。

はたまた自殺願望者になるかもしれないって俺の中で警鐘が鳴った。

立ち直る勇氣は何処からも来ないって思った。
芸能界って残酷で。

自殺願望があるみたいなデマはひっきりなしに流れてて。
泉野真理はドラムスで潰れたみたいなことは新聞にだってでかでかと流れた。

それだけ注目度の高いシンガーになったと同時に。
それだけ格好の獲物になったとも言えるんだ。

そこへ現れたのは。
紛れもなく真理の血を分けた姉の結花だった。
結花さんは俺のことを一矢君と呼ぶ。
真理と似た声で。
真理と似た顔立ちで。

「一矢君。真理の事お願いね？」

私公務員だから飛ばされちゃうけど。

遠くからでも真理のこと応援してるから。

だからお願いね？」

結花は両親が心中した責任と。

真理がやってるバンドが襲われた事と。

その責任を一身に背負って遠くの町に飛ばされた。

愛する人には振り向いてもらえなかったと涙を堪え俺に言った。

「だけどね。一矢君。

私幸せなの。先生になるのが夢で。

あの人の嫁さんになるのも夢だったけど。

いつかは諦めなきゃならないって思ってたから。

諦めが悪いからいつもね。」

真理とは違う眼差しはそれでも光を称えてた。

こんなにも真理とは違うけど。

そして冒頭に戻り。

俺は真理にプロポーズして。

結花を探しに行つて。

感動の再開を果たすんだ。

いつの間にか目の前は桜の舞う時期となり。

その時期に俺たちは新しいバンドメンバーを迎えて再開する。

新生WAIT FOR YOUの活動開始だ。
みんないくよ。

終。

活動開始（後書き）

次回真理の話へと続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8788e/>

桜の木の下で

2011年10月5日02時24分発行